

## 2歳児クラスにおける子どもの 主体性を尊重した保育者の指導についての検討

大 元 千 種

A Study on Guidance Valuing  
Children's Autonomy within Two-Year-Old Class

Chigusa OHMOTO

### 【要 旨】

子どもの主体性を尊重し、環境を通して行う保育においては、ねらいをもって計画を立てながら変更もためらわない保育者の柔軟性と主体性が問われる。本稿においては、2歳児クラスの子どもの主体性をたいせつにした保育をしようとしている保育者の実践記録等により、保育者の指導について検討した。それにより、次のことが明らかとなった。保育者は、子どもの生命や安全を保障する基本的な時間や場所についての枠組みをもちながらも、子どもの気持ちの動きを行動から読み取り、一斉にではなくタイミングを見計らって次の活動に誘うなど、子どもに無理のない保育を進めている。保育者も子どものやる気に乗って保育をすすめることでスムーズに保育ができると実感している。トンボのメガネ作りも子どもが他の子どもの様子を見ることで自分もメガネがほしい、作りたいと自分で決めて活動に参加する。柔軟に保育ができる要件としては、12名の子どもに3名の保育者という充実した保育体制や、保育者間の保育への共通理解と連携ができていて、活動内容もやり方も、子どもが選んで自分で決めて行動できる自由度があることがあげられる。

### 【キーワード】

2歳児クラス、主体性、保育、指導、保育体制、自由度

### 1. 問題と目的

2017（平成29）年3月、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が同時改訂（改定）されて以来、子どもの主体性が尊重され、環境を通して行う教育及び保育を行うことが求められている。幼稚園

教育要領においては、「幼稚園教育は、幼児自ら意欲をもって環境と関わることによりつくり出される具体的な活動を通して、その目標の達成を図るものである」と記載されている。さらに、その解説では、「周囲の環境が発達に応じたものでなかったり、活動に対して適切な指導が行われなかったりすれば、幼児の興味や関心が引き起こされず、活動を通しての経験も発達

を促すものとはならない。すなわち、幼児が主体的に環境と関わることを通して自らの発達に必要な経験を積み重ねるためには、幼稚園生活が計画性をもったものでなければならない<sup>1)</sup>とある。保育所保育指針の解説においても、「保育において子どもの主体性を尊重することは、子どものしたいようにさせて保育士等は何も働きかけないようにするというのではない。…(中略)…保育士等が乳幼児期の発達の特性と一人一人の子どもの実態を踏まえ、保育の環境を計画的に構成することが重要となる」<sup>2)</sup>と記載されている。幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説においても、「園児が環境との関わり方や意味に気付き、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになることが大切」であり、「園児の主体性と保育教諭等の意図がバランスよく絡み合って成り立つ」<sup>3)</sup>と記載されている。

すなわち、子どもがしたいことを試行錯誤しながら活動するには十分な時間と自分の判断で行動できる場や環境という空間が必要であり、それを保障していく保育の計画が重要である。限られた集団保育の時間と空間において、どのように子どもの時間と空間を設定するかが保育者に求められるのである。

さらに、保育所保育指針の解説では、「子どもに計画通り『させる』保育ではなく、その時々の子どもの状況や遊びの展開に応じて環境を適宜変えていくなど、保育士等の適切な判断の下、保育が柔軟に行われることが求められる」<sup>4)</sup>とされている。したがって、子どもの主体性を尊重した保育を行うためには、子どもの状態に応じて、子どもの興味や関心をたいせつにして保育者が計画を立て、環境を整え、活動を導き出し、状況によっては計画の変更もしていく必要がある。つまり、子ども主体の保育においては、ねらいをもって計画を立てながらも変更をためらわない保育者の柔軟性と主体性が問われるのである。

集団活動になじめない3歳児の保育の実践記録の分析(大元, 2023)<sup>5)</sup>によれば、担当の保育者はその子どもの意思をたいせつにして柔軟な

対応をしている。それによって他の子どもたちにもやりたいことを認めることとなった。たとえば、部屋を出ていくMの担任は、「Mはホールにおりたいんで。行きたかったら行っておいで」と言うと、Mのところに行く子どもも何人か出る。それでクラスが収集がつかなくなることはなく、それどころか、かえって子ども同士の関係が築かれていく。集団活動に馴染めなかった子どもも友達と一緒に活動をする楽しさから活動や行事に取り組むようになっている。子どもを信頼して待つ保育者の姿勢が、保育者からわかってもらえている、認められているという安心感を子どもたちにもたらし、保育者との信頼関係が築かれている。それがあから子どもは保育者の意図も受け入れながら自分の意思で行動することや行事に取り組むことができるのである。保育者も子どももお互いが折り合いをつけながら保育を創り出しているといえる。

かつて城丸(1981)<sup>6)</sup>は、「指導とは何か」について、「もともと、指導というものは、子どもが言うことをきかない権利があることを前提」とすると述べている。つまり、指導は子どもからの「拒否を許す」のである。「おいで」と言っても幼児が知らん顔をしたりことさら反対方向に走っていったりすることも「拒否」である。「それを強制力を使わないで、何とかうまく自分の方向にひきつけ、自分の意図する方向に動かしていくのが指導」である。城丸は指導とは「そそのかすこと、誘いかけること、そして方向づけること」、つまり「やる気をおこさせ、方向づけること」であると言う。

先述の集団活動になじめない3歳児の実践記録の事例の子どもたち<sup>7)</sup>は、自分で着替えや排泄、食事等の生活自立も時間はかかるがある程度できており、おとなが何を伝えているのかはわかっている。そのうえで、自分がしたいことやしたくないことを行動で意思表示をしている。つまり、「指導への拒否」である。ところが、3歳未満の子どもたちは生活自立もまだ十分にできておらず、保育者の世話や援助に頼ることが多い。自ずと時間の過ごし方や活動の場も保育者に委ねられることが多くなる。また、

おとなの話を聞き取って、自分で見通しをもって行動することも難しい子どもたちも多い。そのような幼い子どもであっても、「子どもの意見表明権」は尊重される<sup>注1</sup>。また、前述の城丸の言葉にもあるように、子どもの思いと保育者の意図とは違うことが多いため、子ども主体で保育をしようとすることで保育者の計画の変更が余儀なくされ、保育の難しさも出てくる。

本稿においては、2歳児クラスの子どもの主体性をたいせつにした保育をしようとしている保育者の実践記録等により、保育者の指導性について検討する。子どもの意思や行動に対して保育者が柔軟に対応することができる要件についても明らかにしたい。ここでいう子どもの主体性を尊重した保育とは、子どもの意思を尊重した保育であり、子どもが自分で選ぶ、自分で決めるなど自分で行動することができるような保育である。対象となる保育者は特別な保育を行っていない。保育者の一人は子ども一人ひとりに合わせた「流れる日課」<sup>注2</sup>の保育を見学して、2歳児クラスの子どもたちが遊びや生活を自分でしている様子を見ている。保育者間でその園の保育の情報は共有されているが、それを真似るのではなく、自分たちができる限りで子どもの意思をたいせつにして、子どもが自分で行動できるよう考えて保育を行おうとしている状態である。模索しながらの保育であるため、難しさもある。その難しさはどこにあるのかについても検討したい。

## 2. 方法

### (1) 研究の手順

園内研修の対象となった2歳児クラスの保育について、大元が手書きで記録をとり、午睡時に子どもの行動および言葉についての理解や保育者の意図および行動について保育者と一緒を検討し、その後大元が実践記録を分析する。

### (2) 日時

2023年9月21日(木) 10:00~12:00

自由遊びから給食まで

### (3) 対象クラスの保育者と子どもの在籍数

A 認定こども園2歳児クラス

保育者3名…I保育者、F保育者(担任)

S保育者(パート)

在籍数12名…男児5名、女児7名

### (4) 倫理的配慮

本研究については、研究の目的、方法、個人情報保護、研究参加の自由、研究不参加での不利益がないこと、研究成果の公表、問い合わせ先について、所属長に書面と口頭で説明し、各保育者には書面で説明し、同意書の提出をもって協力の承諾を得た。この調査は別府大学・別府大学短期大学部研究倫理審査委員会の承認を得て実施された。

## 3. 結果

### (1) 2歳児クラスの保育の検討

#### 1) 当日の指導案

当日の保育は、I保育者がクラスの保育リーダーをし、F保育者が次の活動の準備や環境作りを行い、S保育者が全体のフォローをしながら3名で行っている。I保育者による指導案は次ページのとおりトンボのメガネを作り、そのメガネで遊ぶことが中心である。興味をもった子どもがカラーセロハンをメガネ、つまりトンボの目の枠に貼り、ストローの胴体に画用紙の羽をつけて「トンボのメガネ」を作り、部屋や園庭でいろんなものをメガネで覗いて遊ぶという活動である。一斉保育ではなく、したい子どもが自由に参加する活動にしたいという保育者の意図があるため、「自由遊び」と記述されている。

#### 2) 実際の保育の流れ

トンボのメガネ作りとその前後の実際の保育について、大元による記録からたどる。自由遊びに入る前からの活動の流れがわかるように、おやつからの記録である。なお、子どもたちは当日までにごぼうの丸い実を模した色画用紙を糊づけする製作を行っており、その日も登園し

て「ぶどうの実」を大きな段ボールに糊づけをして楽しんでいる子どもが数人いた。

以下の実際の保育の流れで、保育者の行動（以下、保育行動）に波線の下線を引き、番号を〔①〕～〔②〕までつけている。観察時間内の全ての保育行動ではないが、活動の変わり目となる言葉かけや子どもに対する主な対応の記録である。

\*\*\*\*\*

【実際の保育の流れ】

10:05 おやつ

一斉におやつを食べるのではなく、部屋で遊んでいた子どもや外から帰ってきた子どもがトイレに行き手洗いを済ませて席につく。席についた子どもからF保育者がおやつのイリコの小皿と牛乳のコップを配り〔①〕、順次「いただきます」をして食べる（机は1つで椅子は6つ。最初は4人）。

10:09 自由遊び

食べ終えた子どもたちは小皿とコップをワゴンに運び、ままごとコーナーや積み木で遊び出す。排泄と手洗いを済ませた子どもが空いた席につき、おやつを食べる。I保育者とF保育者がおやつの机につき、S保育者がままごとコーナーで子どもたちの遊びにつく〔②〕。

この時点ではトンボのメガネのコーナーは設定されていない。保育者が前日作った目に赤いカラーセロハンを貼った「トンボのメガネ」は壁面の作品掲示用のロープに洗濯ばさみで止められていた。登園時に気づいた子どももいたが、この時点では特にそのトンボに強い関心を示す子どもはいない。

10:17 トンボのメガネ作り(自由遊びの中で)

最後の子ども3人がおやつを食べ終わったところで、I保育者が壁面の「トンボのメガネ」を取り、隣にいた1人の子どもに見せる〔③〕と、2人の子どもも側に寄ってくる。代わる代わるメガネを覗いている間にもう1人やってく

【2歳児組9月21日指導案】(トンボのメガネ作りからの遊びを中心に)

子どもの姿：園庭でトンボを見つけ、追いかけたり観察したりする。トンボを見つけると「トンボのメガネ」の歌を歌い楽しむ。

主な活動：自由遊びを楽しむ。トンボのメガネを作る。

ねらい：カラーセロハンを通して見える景色や色の変化に興味をもつ

在籍：男児5名、女児7名 計12名

担任：2名とパート勤務1名

時間	環境構成と予想される幼児の行動	保育者の援助活動
10:10	○おやつ	○おやつを食べたい子から食べる。 ○「トンボのメガネ」のコーナーを用意しておき、自由に参加できるようにする。
10:20	○自由遊び ○「トンボのメガネ」を作る ・トンボの目の部分にカラーセロハンを貼る。 ・トンボの羽（画用紙）にペンで自由に描く。 ・胴体（セロハン）に羽と目の部分をテープで貼り、完成。 ○トンボのメガネを作らない子は、自由遊び（おままごと、積み木、お絵かき等）を楽しむ。	○作り方を伝え、製作を意欲的に楽しく参加できるような声かけ、関わりを行う。 ○目の色や羽と羽の幅、羽を平行にするのかクロスさせるかなど、子どもが自由に決めながらのびのびと製作ができるよう見守り、援助する。
10:50	○完成したら、テラスや園庭に出て、自分のメガネで遊ぶ。	○自分で作ったメガネで遊ぶなかで、色の変化や見える景色の違いに気付けるよう関わる。
11:25	○排泄、手洗い ○給食準備	○メガネをどうしたいか聞き、自分で考えながらロッカー等に入れるよう関わる。
11:30	○給食	
12:10	○午睡	

る。I保育者がカラーセロハン（赤、黄、青）を机に置く〔④〕と、3人の子どもが椅子に座って、セロハンを手に取り、赤とか黄色とかセロハンの色を言ったり、セロハンを通して周囲を見たりする。

I保育者が「してみる？」と尋ね、子どもの意思を確認する〔⑤〕。机に来た子どもたちはメガネ枠をもらい、セロハンの色を選ぶ。お互いに赤や黄色と言ひ合ひ、見せ合う。I保育者がトンボのメガネ枠に「ここにこう塗って」と糊をつけるよう教える〔⑥〕が、セロハンに糊をつける子どもや丸いメガネ（目）の枠に糊をつけるのに難しそうにしている子どももいる。子どもは、I保育者に糊づけを手伝ってもらったり糊がついていないところをセロテープでとめてもらったりしてメガネを作る。なかには、赤いセロハンを貼ったメガネの下に黄色のセロハンをつけている子どもや、1枚貼った上に別の色のセロハンを重ねて覗いてみる子どももいる。子どもは自分が作ったメガネをI保育者に見せ、I保育者は「そうしたの」「何色（に見える）？」〔⑦〕と返す。

保育者のトンボのメガネを持っていた子どもは、ままごとコーナーで遊んでいる子どもたちのところに見せに行く。

おやつを片付けを終えたF保育者が、机の横の床に座って、上手く糊付けできない子どものメガネのセロハンをセロテープで止めてやり始める〔⑧〕。

トンボのメガネにあまり興味を示さない子どもたちもいたが、友達の様子を見て徐々にメガネ作りに参加してくる。I保育者が胴体用の太いストローを取りに隣の部屋に行く〔⑨〕と、それに気づいてついて行った子ども3人も帰って来てメガネ作りに参加する。セロハンをメガネに貼った子どもは、羽の画用紙に模様を描き、I保育者かF保育者にストローの胴体をセロテープで貼ってもらう〔⑩〕。トンボのメガネができた子どもは、メガネを覗きながらままごとコーナーや他の玩具で遊んでいる子どもたちのところに見せに行き、徐々にメガネ作りに子どもたちが参加するようになる。「○○ちゃ

ん作りたい」と主張して入ってくる子どももいる。

10:23 メガネやさんです

メガネ作りの人数が増え机がいっぱいになると、F保育者が机の横の床にセロハンとメガネの枠を広げておき、「メガネやさんしてるんですけど。いらっしやませ」「どれがいいですか」と呼びかけながら、セロテープでメガネ枠にセロハンをつけていく〔⑪〕。糊付けよりもセロテープでつけるほうが多くなり、机では子どもが羽に模様を描く側でI保育者がセロテープで補強や羽や胴体をつける作業をし、床ではF保育者がセロハンや羽や胴体をセロテープでつける作業をする。次第に完成したトンボのメガネを持って部屋の中を覗いたりトンボのメガネの歌を歌って走ったりする子どもが増えてくる。

ままごとコーナーのS保育者の膝に座っていた子どものところにメガネを見せに行く子どももいる。それを見た膝の子どもが小さい声で「私も作る」とつぶやくと、S保育者が「○○ちゃんも作るって」とF保育者に向けて声をかける〔⑫〕。それに気づいたF保育者がその子に「作る？」と呼びかけ、その子の座る場所を設け、メガネを作る〔⑬〕。S保育者の横でその様子をずっと見ていた最後に残った子どものところに膝に座っていた子が作ってもらったメガネを見せに行く。S保育者が「○○ちゃんも作る？」と尋ねると〔⑭〕、子どもは「うん」と答えてF保育者のところでメガネを作ってもらい、嬉しそうに持って遊ぶ。

10:39 全員のメガネが完成し、園庭へ（雨上がりで水たまりもある）

子どもたちは部屋を走り回ったり、テラスから外を覗いたりしている。I保育者が「お外見に来ていいよ」と戸を開ける〔⑯〕と、子どもたちが外に出る。ところが、保育室の前庭は1歳児組の子どもたちが泡遊びをしていたため、I保育者とS保育者が子どもたちと一緒に園庭に行く〔⑰〕。「お外行かない」と言った子ども1人とF保育者が部屋に残る〔⑱〕。

子どもたちはトンボのメガネを持って園庭に

出たが、固定遊具の汽車のすべり台やブランコ、砂場に興味がいき、メガネをI保育者に預けて、てんでに遊具や砂場で遊ぶ。I保育者は子どもたちのメガネを持って、汽車のすべり台の横で子どもの遊びの様子を見守る。S保育者は砂場の子どもたちのところにいる [19]。

#### 10:50 トンボのメガネで遊ぶ

何人かの子どもが思い出したように「〇〇くんのメガネは？」などと取りにきて、トンボを飛ばすふりやメガネで園庭を見渡すなど楽しそうに遊んでは、また遊具で遊ぶ。長靴の女児2人はトンボを手に持ったまま走り回り、そのまま水たまりに入ってバシャバシャ跳ねる。長靴の中も服もびしょ濡れになるが、トンボのメガネは濡らさないように気をつけている。

#### 11:00 園庭から部屋に

I保育者の「そろそろ帰ろうか。お水遊びをしよう」の声 [20] に子どもたちはばらばらと集まり、部屋に帰る。

(以後、略)

その後、水遊びをして、給食、午睡となる。

給食の配膳の前に、I保育者が子どもたちに「トンボさんどうする？ [21]」「みんなのトンボさんどこに片づけた？」「ロッカーの中？」「ぞうさんバッグの中？」と尋ねると、子どもたちが口々に自分のトンボを置いている場所を言ったり、手にまだ持っている子どもはロッカーの上に置いたりする。机に置いている子どもに、I保育者が「給食だから、ここに止まっているよ」とその子のすぐ側のロッカーの箱に立てる [22] と、その子どももメガネの場所を見る。その間も「トンボのメガネ」の歌を歌っている子どもがいる。

給食後、午睡ベッドに横になるときも手に持って寝ようとするなど、子どもたちは「自分のトンボのメガネ」に特別な愛着をもっていた。

\*\*\*\*\*

### 3) 保育者の計画と実際とのずれ

保育者の計画が実際にはどのようなことになったかについて、↓で示す。

#### ○メガネ作り

自由遊びの中でのトンボのメガネ作りを行うため、「トンボのメガネコーナー」を用意しておき、自由に参加できるようにする予定であった。メガネに関心のない子どもや作らない子どもたちは別の遊びが自由にできるように計画されていた。



- ・実際には、「トンボのメガネ」のコーナーの設置はなく、壁面のロープにI保育者の作っていたトンボを飾っていただけである。それでも、朝気づいた子どもが「トンボ」と言って指さしていた。メガネ作りは、おやつの後机に残った子ども3人にI保育者がトンボを見せたところから始まった。
- ・それ以外の子どもたちはままごとや積み木、車、絵本などで遊んでおり、メガネに気づいてそこに行く子どもはほとんどいなかった。
- ・保育者の作ったトンボを持って他の子どもたちのところを走り回っている子どもや完成したトンボを他の子どもに見せに行く子どもがおり、それを見た子どもたちが次第にトンボ作りに参加するようになった。
- ・I保育者が隣の部屋に胴体のストローを取りに移動すると、別の遊びをしていた子どもたちがついて行き、I保育者と一緒にニコニコしながら帰ってくるとそのままトンボのメガネ作りに参加した。
- ・最後残った2人は、周りの子どもたちが楽しそうに作ったり遊んだりしている姿を見て、自分から「やりたい」と声に出した。最後の1人には、「〇〇ちゃんも作る？」とS保育者が尋ねているが、その子どもが参加しようと気持ちを向けているタイミングを見計らった言葉かけであった。
- ・自由な遊びを保障していたが、最終的に子ども全員が自分の意思でトンボのメガネを作り、外には行かないと言った1人の子ども以外は園庭に遊びに出た。ところが、残った子どもはその後の中庭の水遊びには参加し、園庭の遊びに参加した中の1人は水遊びには参

加しなかった。いつもは率先して水遊びに参加する子どもがこの日は水遊びに行かないと言ったことは保育者の予想に反していたという。子どもはその時の気分や状態でやりたいことも変わってくる。保育者が無理強いをしなかったことから子どもが自分を率直に出して行動できていた。

メガネ作りでは、セロハンを糊でつけてはがれそうなところだけをセロテープで補強する予定であった。子どもたちが作ることを想定して、作り方の指導が計画されていた。



- ・実際には、メガネ枠への糊付けは難しく、ほとんどの子どもは保育者にセロテープで留めてもらってメガネを作った。途中まで作った子どもも最後の仕上げは保育者にしてもらった。
- ・トンボの羽にマジックで模様を描くのは子どもたちがして、胴体と羽とメガネをつけるのも保育者にしてもらっていた。F保育者が、「メガネやさん」を始めて、メガネは保育者が作る形になったが、完成したら、「自分のトンボのメガネ」であった。

目にカラーセロハンを貼付けし、羽と胴体をつけるように計画されていた。羽にもマジックで模様を描き、羽のつけ方などの工夫してほしいという思いがI保育者にはあった。



- ・トンボのメガネ(目)だけで、羽や胴体はいらないう子どももいた。保育者はどれを受けとめており、完成形にこだわらない自由度があった。

#### ○メガネで遊ぶ

自分で作ったメガネで遊ぶなかで、色の変化や見える景色の違いに気付けるよう関わるように計画されていた。



- ・完成したメガネから部屋の中やテラスから外の風景を見て、見える色を言っていたが、外

に出ると遊具に気持ちがいらなくなった。

- ・遊び方を保育者が引っ張っていかなかったが、園庭の子どもたちは、自分から思い出したようにメガネを取りに来て遊んではまた預けて遊具で遊ぶ。子どもは自分のトンボのメガネには思い入れがあったようで、その後も身近に置いていた。

#### ○園庭での遊びから給食までの間

園庭での遊びの後、11:25から部屋に入り、排泄と手洗いをして給食の予定だった。



- ・11:00に「そろそろ帰ろうか。お水遊びをしよう」と呼びかけ、部屋に戻り、上着を脱ぎ、排泄をすませて、中庭でタライに水を入れた水遊びをする。11:20ころから鼻水が出ている子どもから声をかけて部屋に戻し、着替えと排泄、手洗いを済ませて給食にした。

#### 4) 子どもの意思の尊重と保育者の指導

保育実践から見える子どもの意思を尊重した保育者の指導について取り出す。

#### ○次の活動への切り替えの際の保育行動

おやつへの活動の切り替え [①] では、一斉ではなく、準備の整った子どもから席について、保育者がおやつのお皿と牛乳のコップを配膳する。外遊びのS保育者が、部屋に入って排泄や手洗いをする子どもの援助をし、室内遊びについていたF保育者がおやつを準備をした。外遊びのI保育者が最後の子どもと部屋に入り、おやつの子どもの側につく。

おやつを食べ終えた子どもが、自由に遊べるように、S保育者はままごとコーナーの近くで食べ終えた子どもたちの遊びを見守る [②]。S保育者の膝や隣に座って他の子どもたちの遊びを見ている子どもがいる。自分から遊びに行けないこの子どもたちにとって、S保育者が安心の拠点になっているのである。

[③] のトンボのメガネ作りは、自由遊びの一つに位置づけられており、一斉には始められていない。I保育者がおやつの後、机に残っていた子ども3人にトンボのメガネを見せること

から始まった。どう行動するかは子どもに任せており、後から来た3人は作り始めるが、もう1人がそのトンボを持って他の遊んでいる子どもたちのところに行ったことによって、他の子どもたちも気づいてやってくるようになった。S保育者の膝と隣に座っていた子どもも友達の遊びを見て自分の意思で参加した。結局、保育者が誘わないでも全員が自分のトンボのメガネを作った。

園庭に出て遊ぶ時は、部屋の戸口を少し開けて外をメガネで見る子どもや、テラスに出ようとしている子どもの様子を見て、I保育者が「お外見てきていいよ」と大きく戸を開ける〔16〕。テラスとその前の3歳未満児用の園庭は1歳児たちが泡遊びをしていたため、大きい園庭のほうに出ることにする〔17〕が、行きたくない子どもが一人いるためF保育者が部屋に残る〔18〕。

園庭から部屋に帰るときは、I保育者が時間を見て「そろそろ帰ろうか。お水遊びをしよう」と誘いかける〔20〕。

このように活動から次の活動への移行の際、保育者は意図をもちながらも子どもの意思をたいせつにした関わりをしていることで、子どもにとって無理のない活動となっている。保育者は子どもの気持ちの動きを行動から読み取り、タイミングを見計らって次の活動に誘う。また、保育者が促さなくても、子どもが他の子どもの持っているトンボのメガネや遊んでいるところを見ることで自分もほしい、自分も作りたいとその気になっている。友達と同じものがほしいと思うのは2歳児の発達の特徴である。子どもは、友達を誘うこともなく、ただ自分が嬉しくてS保育者や他の子どもにトンボを見せに行くだけである。それがかえって功を奏している。

2歳児クラスも後半になっているため、子どもたちはおやつや給食、午睡といった生活の流れもわかり、排泄や手洗いなども自分でできることが多くなってきている。それを踏まえての遊びからおやつ、おやつから遊びの移行が子どもの意思でできている。子ども主体の保育で重

要な発達を踏まえた保育といえる。

### ○活動の指導

トンボのメガネは作りたい子どもが来て作るようにしている。最初は、I保育者が少人数の子どもにいてねいにメガネの糊づけを教えている〔5〕が、2歳児には難しい課題のようであり、徐々に子どもの数が増えてくると手が回らなくなった。F保育者が最初からセロテープでセロハンを貼る〔8〕〔9〕〔11〕ことで、一気にトンボのメガネ作りが活気づいた。子どもが羽の模様描きをして、難しいセロハン貼りや胴体にメガネと羽を取り付ける作業は保育者がすることで、短時間で全員がメガネを手に入れることができた。セロハン貼りのほとんどは保育者の作業となったが、セロハンの色を選ぶのは子どもであり、自分のメガネに貼ってもらうのを子どもたちは期待しながら待っていた。

子どもたちはカラーセロハンが珍しくて、目にあてて見たり、メガネの下にもつけたり、メガネに貼った上にもう1枚別の色のセロハンを置いて見たりと、メガネの色を楽しんでいる。I保育者は「そうしたの」「何色になった?」〔7〕と子どもの遊び方を受けとめている。

羽や胴体をつけないでメガネだけのものや、メガネの枠にも模様を描き入れたものなど、子どもそれぞれのメガネがある。それらをI保育者は「〇〇くんのメガネだね」と認めている。

子どもの遊び方もセロハンを通して見る色の変化を楽しむだけでなく、トンボになったかのように持って走ったり羽をバタバタさせたりするなどの遊び方を楽しんでいる。園庭に出ると遊具で遊ぶのが忙しい子どもたちであったが、保育者はトンボで遊ぼうなどの呼びかけをせず、子どもの自由に任せている。

作りたい子どもだけが来て作る活動だったが、結局全員が作った。I保育者が最初にトンボを子どもに見せてから最後の子どもが完成するまでにかかった時間は22分である。保育者の作ったトンボのメガネも魅力的ではあるが、友達が作ったトンボのメガネを見て、作りに行ったのである。また、S保育者の膝や隣で友達の様子を見ていた子どもも「作りたい」と声に出

して言った。S 保育者は一緒に見ているだけであるが、膝の上に座っている子どもの気持ちは感じ取れるものがある。S 保育者は子どもが自分で言うのを待っており、「○○ちゃんも作りたいんだって」[12]と、その子どもが一人で行く後押しになる言葉を言っている。F 保育者もそれを受けとめて、その子どもの座る場所を設けている [13]。

#### 4. 考察

##### (1) 計画の変更の意味

前述のように、元の計画と実際の保育とでは変更になっているところがある。その変更の意味とそこからの活動展開が子どもたちにどのように作用したかを考える。

##### ○子どもの状況に合わせたこと

保育者の計画していた活動が変更になっているところは、いずれも元の計画が子どもの発達や状況とずれていたところである。したがって変更をしたことは子どもを主体にした保育をしようとしている保育者にとっては適切な判断といえる。たとえば、子どもにとってメガネ枠にセロハンの糊づけが難しいことがわかり、保育者がトンボのメガネのカラーセロハンをセロテープで貼りつけるように変更をする。計画通りに進めることが指導ではなく、状況に応じて柔軟に変えることが必要である。変更して、メガネ作りが速くなったことから、子どもたちの集中が切れないで、全員がメガネを持って遊びにつながる事ができた。製作では、全工程を子どもが工夫をしてオリジナルのものを作成することをおとなは求めることが多い。しかし、インターネットで紹介されているトンボのメガネ作り<sup>※3</sup>にも見られるように2歳児クラスの子どものためにはトンボのメガネ作りの全工程は難しいと思われる。

##### ○ごっこ的な要素を取り入れたこと

F 保育者が、「メガネ屋さん」を始めたことで、子どもたちはお客さんになって、メガネを作ってもらうことになった。ただのメガネ作りの作業ではなく、ごっこの要素を取り入れたこ

とで2歳児たちもお客さんのつもりでメガネ作りを頼む。それも子どもにとっては楽しいことであった。

##### ○子どもの目の前でメガネ作りをすること

自分のメガネを目の前で作ってもらえるというのは幸せな気持ちになるものである。次第にできていくメガネを待っている間も子どもたちは嬉しかったようであり、できあがった自分のメガネを手にとり子どももトンボになった。羽に絵を描いてそれ以外を保育者が作ったとしても、完成したトンボのメガネを子どもに渡して、その羽にだけ絵を描くようにするのは違う。子どもの目の前でトンボができあがっていく過程を保育者が見せることに意味があるといえる。作っていく過程は子どもの興味を引き、子どもも期待をしながらできあがるのを待つことができた。子どもは楽しみがあると待つことができるのである。

##### ○「トンボのメガネコーナー」など準備ができていなかったこと

今回のトンボのメガネ作りの前提条件ともいえる「トンボのメガネ作りのコーナー」の準備ができておらず、必要な材料も整っていなかった。F 保育者がメガネ屋さんを始めるときも、この部屋にあったセロテープ台は1個だけで、机でI 保育者たちが使っていたため、隣の部屋にセロテープ台を借りに行っている。机にシートを敷かないで製作に入ったため、机が糊やマジックで汚れてしまった。胴体の太いストローも準備できておらず、I 保育者が途中で隣の部屋に取りに行く。

環境を計画的に整えることは保育者の責務である。ところが実践を見ると、ねらいに基づいて準備万端に整えられた環境設定よりも、不足している部分があることが子どもたちの意欲を引き出し、活動そのものに自由度を与えることになっている。つまり、子どもと一緒にメガネを作りながら、子どもと一緒に必要なものを揃えていくことである。突然メガネ屋さんが出現して子どものために目の前でメガネを作ってあげることも特別な思いを子どもたちに抱かせることになり、結果的にかけがえのない自分のト

ンポのメガネになるのである。I 保育者がストローを取りに行く行動も、何をしに行くのか気になった子どもが何人かついて行った。ストローを持った保育者と一緒に帰ってきた子どもたちは笑顔でそのままメガネ作りの机についた。

コーナーで全部の材料が設定されていた状態で始まった活動であれば、このような子どもたちのわくわく感はなかったのではないだろうか。

## (2) 柔軟な保育ができる要件について

当初の計画変更への柔軟な対応や、一人ひとりの子どもの思いに沿った保育をしていくのを可能にしている要件について検討する。

### ○保育者の体制

このクラスは子ども12名に対して正規の担任が2名とパートの保育者が1名で、午前中の活動を3名で担当している。本来の2歳児の配置基準では2名であるが、3名いることによって、柔軟な保育が可能となり、子どもの要求や状態に応じた保育ができていく。

朝登園後の自由遊びも室内で遊んでいる子どもにF 保育者がつき、外遊びにI 保育者とS 保育者がついていく。おやつの時間になると、外遊び担当の保育者が子ども一人ずつに「おしっこどうする?」「〇〇くんも入る?」と声をかけ、S 保育者が援助をしながら入る気持ちになった子どもの排泄と手洗いをすませる。その間にF 保育者がおやつを準備をして席についた子どもからおやつを配る。最後の子どもと一緒にいったI 保育者がおやつを席につき、S 保育者が遊びコーナーでおやつを食べた子どもたちを待つ。

おやつ後のトンポのメガネ作りは自由遊びの位置づけでしているため、子どもが安心して自分のしたい遊びを選ぶことができるよう保育者の配置が考えられている。

自由に遊んでいる子どももいる一方で、まだ自分でしたい遊びを見つけられない子どもや気持ちが向かない子どもは、S 保育者の膝や隣に座って他の子どもたちの遊びを見ていた。その

子どもたちにはS 保育者が安心できる居場所となったことから、トンポのメガネ作りやトンポのメガネを持って遊んでいる様子もよく見ており、自分から「作りたい」の声を出すことができたといえる。I 保育者は振り返りの中で、自分に余裕がなく子どもに歌や声かけができなかったと反省をしているが、F 保育者がメガネ屋さんをしたことから子どもたちはのびのびと作っているようであった。

また、外に行かないという子どもや、水遊びをしないという子どもの思いを柔軟に認めることができたのも3名体制であったことが大きな要件となっている。

子どもの思いをたいせつにした保育のためには、それを可能とする条件整備として保育者の人数がある。保育者が余裕をもって保育をするためにも保育者の配置は重要な要件である。

### ○保育についての保育者間の共通理解と連携

保育者3名が保育の流れや保育の方向性について共通の認識をもっていることも重要な条件である。流れる保育については、3名のうちのF 保育者のみが見学に行ったが、その情報を保育者間で共有している。きちんとした担当制で流れる保育を行うということではなく、個々の子どもに合わせた生活をするということを通して行っていた保育であるため、子どもの意思確認を行い、指示を控えた言葉かけになっていた。複数担任制においては保育についての共通理解をもっておくことは非常に重要である。

また、保育者間で保育の役割分担がされているが、それぞれの保育者は子どもの様子と他の保育者の行動や全体の流れなどから主体的に判断をして保育を協力して行っている。保育者間で補い合って保育を進めていたため、困ったり取り残されたりしていた子どもはおらず、子どもは自分で決めたことをやれたといえる。

### ○活動内容と時間や場所の自由度

子どもが自分で考えて試行錯誤しながら取り組むには活動内容と時間や空間、教材・玩具等に融通がきく自由度が必要である。今回の実践では教材の準備が十分に整っていない状態で始まり途中で揃えていく場面があった。すべての

活動が準備不足であるのは問題だが、時には子どもたちの活動の様子を見て、保育者も一緒に材料を揃えながら活動をしていくことで、子どもたちはその過程を見ることができる。それによっていっそう楽しく活動ができる。自由遊びの環境を整えるためには十分な材料が必要であるが、足りないということも子どもたちの工夫や発想を生み出していくことにもつながる。必ずしもコーナーにその材料を全て揃えることが子どもの主体性や創造性を生み出すとはいえないのではないだろうか。

しかしながら、基本的に子どもの発達に応じた活動内容が想定されてその準備をすることが求められる。今回は2歳児クラスであったので、どこまで準備をした教材を子どもに渡すかについても考えられる必要がある。

#### ○保育者の責務としての安全管理

保育者には子どもの命と安全を守る責務がある。子どもたちがトンボのメガネができて戸を少し開けて外を眺めたりテラスに出ようとしたとき、保育者が戸をあけて外に出てよいことを伝えている。保育者は子どもが勝手に外に出ることを認めているわけではない。この園の幼児クラスでは、子どもが部屋から出ていくときには、出るのは止めないがどこに行くかを言ってから出るよう指導をしている。子どもの安全確認をしておくことは保育者には必要なことであり、子どもも安全に安心して過ごすことができるのである。

時間については、特に子どもが幼いほど保育者による基本的な生活リズムを整えていくことが必要となる。食事や午睡など子どもの健康や命に関わる活動の時間を示しながら、子どもの気持ちが向くような関わり方が求められる。時間や空間に幅のある基本的な枠組があることは、子どもたちが安全に安心して自由に行動するうえで重要だといえる。

### (3) 保育の難しさについて

#### ○計画による縛り

指導案を作成した保育リーダーのI保育者から「余裕がなく、のびのびと関わることができ

なかった」という反省が述べられた。保育に難しさを感じたようである。ところが、サポートをしていたF保育者からは「子どものやる気に乗っかって『自分でやりたい』気持ちを持ち続けるようサポートすると結果的に何事もスムーズに行え、子どもにとっても保育者にとっても平和に過ごせる気がしている」という報告がされた。

この違いはどこから来たのであろうか。指導案を作成したI保育者には全体の保育を進める責任感から計画どおりに進めていこうとする思いが強くあり、予定通りにいかない事態になったがために余裕がなくなってしまったと考えられる。計画に捉われることにより、子どもたちに楽しく自由にトンボのメガネ作りができるようにしたいと願いながら、保育者自身が保育に不自由さを感じてしまったといえる。

一方、F保育者は、保育の流れに沿いながらも、具体的な子どもの姿から予定を変更して、保育者がセロテープでメガネのセロハンを貼るようにしている。しかも、「メガネ屋さんです」と呼びかけをするなど、メガネを作りたい（作ってほしい）という子どもの思いをより強くすることになった。サポートの役割という立場の違いもあるが、子どもの思いや状況に応じた保育では柔軟な変更も必要である。

#### ○活動内容とねらいとのずれ

この指導案では、主な活動は「自由遊びを楽しむ」「トンボのメガネをつくる」とあるが、ねらいは「メガネのカラーセロハンを通して見える景色や色の変化に興味をもつ」である。こうしてみると、主な活動として考えられたものとねらいとのずれがある。そのため、保育者自身が何をたいせつにしたいのかを見失ってしまうことになったのではないか。

I保育者の実践後の振り返りでは、最初に糊のつけかたを見せたほうがよかった、テープも両面テープをトンボの目に貼っていればよかった等作り方の指導についての反省が多く出されていた。しかし、ここでは作り方よりもメガネでの遊びを子どもたちが楽しむことを優先した活動展開が考えられる必要があるのではないだ

ろうか。

保育者がメガネで遊ぶ前のメガネ作りに意識が集中してしまい、作り方を指導する活動になった。それが2歳児クラスの子どもたちには難しかったため、保育者も計画どおりにいかない難しさを感じたと考えられる。

また、トンボのメガネを作るという活動も自由遊びの流れで位置づけられていることから、2歳児クラスの子どもにとって面白い、作りたいたいと思う場面作りや、発達に合ったものであることが重要である。さらに、トンボのメガネ作りもその遊び方も保育者は多様に想定しておくことも必要であろう。子どもたちはメガネを覗いて見るだけでなく、トンボのメガネの歌を歌い、トンボのメガネを持ってトンボのように走り回ることを楽しんでいて、計画ではトンボのメガネを完成した子どもたちはそれを持って外に遊びに出ることになっていた。もし、作らなかった子どもたちがいた場合、どのようにする計画であったかが不明である。いろいろな子どもの遊び方や姿を予想することで、保育者自身が子どもと一緒に保育を創り、楽しむことができるのではないかと考えられる。

## 5. まとめと今後の課題

本稿においては、2歳児クラスの子どもの主体性をたいせつにした保育をしようとしている保育者の実践記録等により、保育者の指導について検討した。

柔軟に保育ができる要件については、12名の子どもに保育者3名という保育体制が充実していることや、保育者間の保育への共通理解と連携ができていて、活動内容とともに時間や場所を子どもが選んで自分で決めて行動できる自由度があることがあげられる。

保育者は子どもにとって作業が難しいことによる変更や、天候や遊びの状態からの活動変更、個々の子どもの気持ちに応じた対応等をしており、子どもにも保育者にも無理のない保育となっている。

保育者は、子どもの生命や安全を保障するた

めの基本的な時間や場所についての枠組みをきちんともっているが、一斉ではなく子どもの気持ちの動きを行動から読み取り、タイミングを見計らって次の活動に誘うようにしている。「しない」という子どもの意見表明もきちんと受けとめて対応している。

子どもの遊びや活動の仕方は、環境設定や言葉かけなどの保育者による働きかけだけによるものではない。きっかけは保育者であっても、子どもは他の子どもの様子を見ることで自分もほしい、作りたいたいと活動に参加している。トンボのメガネそのものも子どもに魅力的であるが、2歳児クラスの子どもたちにとって、「友達の持っているもの」や遊びはいつそう魅力があるのである。保育者の膝から離れられない子どもも思わず「私も作りたいたい」と言って膝を離れて行動するほどである。子どもが保育者や他の子どもの様子をよく見るということが子どものしたい気持ちを膨らませるといえる。

人だけでなく、室内に置かれている物や園庭の遊具や木々、小さな虫、空の色や流れる雲、散歩で出会う草花や動物や自動車など子どもがよく見ているものは身近にたくさんある。いろいろな物をよく見て自分で決めて行動するまでの時間を子どもとともに過ごしなが、待つことも保育者の指導性といえる。

このクラスの保育者たちは、子どもの意思をたいせつにして子どもが自分で行動できるような保育を模索しながら、できるところから取り組んでいる。日課の中でも保育者主導で一斉保育的に行われている時間帯や活動もある。そうしながらも、〇〇保育という形や主義にこだわるのではなく、自分たちの保育を今日の前の子どもたちと一緒に創っていかうとしている。今後の保育について継続して検討していきたい。

## 6. 謝辞

本研究にご協力くださいました保育者の皆様に心より感謝申し上げます。

2023年 pp.101-113

## 注

注1 子どもの権利条約においては、乳幼児の意見表明権は聴かれる権利とも捉えられており、「もっとも幼い子どもでさえ、権利の保有者として意見を表明する資格があるのであり、その意見は『その年齢および成熟度にしたがい、正当に重視され』るべきである（第12条1項）」とされる（国連子どもの権利委員会 一般的意見7号「乳幼児の権利の実施」2005年 日本語訳：平野裕二）。

注2 「流れる日課」とは、「一人ひとりの子どもの行為や生活全体がスムーズに流れること、つまり不必要に待つ時間であったり、行為が中断されたりすることがない日課」である（吉本和子『乳児保育 一人ひとりが大切に育てられるために』エイデル研究所2002年 p.112）。特に3歳未満児クラスでは、担当グループで子ども一人ひとりの生体リズムや生活リズムを考えた日課をつくって、それぞれのグループの連携をはかりながら全体の日課をすすめていく。

注3 たとえば、ふじおかようちえんの2歳児クラスの紹介がある。この園の製作も、子どもたちが実際に作るのはXの形に画用紙を切って準備された羽にカラーマジックで絵や模様を描くところが紹介されている。胴体に貼付ける箇所には両面テープも貼られており、子どもがその反対側に絵を描く。胴体の太いストローも2本を事前にビニールテープで巻いて羽が貼りやすいように広い面になっている。おそらくセロハンも事前に保育者がメガネ枠に貼っている。

<http://ichimurahiroki.com/2021/09/09/tonbo/>

(2023年10月15日アクセス)

- 6 城丸章夫『幼児のあそびと仕事』草土文化 1981年 pp.157-158
- 7 大元, 2023年 前掲書

## 引用文献

- 1 文部科学省『幼稚園教育要領解説 平成30年3月』フレーベル館 2018年 p.96
- 2 厚生労働省『保育所保育指針解説 平成30年3月』フレーベル館 2018年 p.38
- 3 内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説 平成30年3月』フレーベル館 2018年 pp.28-29
- 4 厚生労働省, 2018年 前掲書
- 5 大元千種「保育の時間と空間における子どもの主体性について」『別府大学短期大学部紀要』第42号